

京鹿子

令和元年五月五日発行
通巻二二二号
発行所 京鹿子出版部

7月号

夏季吟旅特集号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その四十六

恐るべし孫七人の夏が来る
みどり児の主役顔して子供の日
馬柵沿ひに走るたてがみ夏に入る
奥の手の蛸の逃げ足糶り佳境
壺の蛸明石の闇を吸ひつくす
父の日の巖つき貌や後ろ面



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

吟 旅 作 品 夏 の 雪



夏 つばめ 中山道 を 飛脚 とび (奈良 井宿)

奈 良 井 宿 ひとつ 嘶 と なる 薄 暑 ()

悲 史 つづる 駒 ケ 根 い ま も 夏 の 雪 ()

松 葉 散 る 脇 本 陣 の 闇 の 色 (妻 籠 宿)

蝦 蟄 そ ろ り 大 名 び い き の 陣 の ぞ く ()

近詠

和田 照海

磯遊

八重潮のふくらんでくる磯遊

南に穴の海とや花の山

河口湖やなまり令和の行々子

巢燕や海峡の渦光り合ふ

出港の二笛小さくなる日傘



松本 鷹根



新樹の園

孫曾孫つどひ新樹の園巡る

せせらぎの若葉明りに息を研ぐ

散る樹下に孕寿彩る八重桜

藍深し夏鶯のこぬれ空

妻に蹴く坂ゆるやかにラベンダー

近 詠

塩貝 朱千

人力車

さくらさくら車夫饒舌に里自慢

仲麻呂を諳んじ麗ら三笠山

女車夫を拍手で囃す花の径

みほとけの膝下を埋める春撩乱

花の昼白壁の径揺れながら

英華採集

飄々と詠むべしさくら増殖中

東 京 高 島 正比古

久女の句に「花衣ぬぐやまつはる紐いろく」があるように桜の句は多くの俳人にとつて身近な存在であり様々に詠まれていた。故に、万人が試行錯誤を繰り返して独自の詠みに苦心するのである。掲句の「飄々と詠むべし」は自解とも取れるが我々への訓解とも取れる。殊更、身構えないで桜の下に自分の身を置けばよい、の意であろう。そして、桜の満開が近づいていることを「増殖中」と捉えた表現の妙が光る。二句一章の破調のリズムの効果も見逃せないところである。

終章は苔の彩り落椿

京 都 福 森 順 子

碧梧桐の句の「赤い椿白い椿と落ちにけり」は、椿の見事なまでの落花ふりと彩りの鮮やかさを端的に言い表しているが、季語・落椿の本意をどの様な観点から詠むのかが独自の表現につながってくるのである。「終章は苔の彩り」と捉えたところは、椿の美学であり作者自身と重ね合わせているのではないか。この句から鷹女の句の「老いながら椿となつて踊りけり」の句が浮かんでくる。

山藤の大樹にからむ処世術

高 槻 石 澤 昭 代

山にある藤は、手入れが行き届いていないので伸び放題好き放題にその蔓を四方八方に伸ばしている。樹木の大小を問わない訳で、当然のことながら大樹に対しても無遠慮に触手を向けることになる。大樹にとつてはまるで何者にも向かつてくる若者の様に感じるのではないか。それは、若者が持つている世の中を渡る処世術なのかも知れない。小なるものが大へ向かわんとする気構えに人と重ね合わせて詠んでいくと俳諧味を覚える。

神麓集

青月夜 藤岡紫水

鼓笛の音新樹に響く野外能
新緑や無量の笑みの磨崖佛
青月夜一村奈落に眠り落つ
朝光^かゲに添うてむらさき鉄線花
青空があればよしとす子供の日

短夜 沼田巴字

高層ビルの窓の多さよ大西日
ごきぶりの一芸見たり死んだふり
よく生きよよく生きよとて行々子
欲得も何もなきなり蟬時雨
短夜の思ひちりぢり書を展く

花洛忌 丸井巴水

半眼の薬師眠らぬ花洛の忌
金雀枝を捲りて風が色もてり
樹木医の一撫ぜ二なぜ余花白し
浮かれ出る水母一団遠霧笛
揚雲雀古墳を開く鍵持てり

祝・令和 植村蘇星

風光る令和祝福大八洲
たをやかに令和の始動若葉映ゆ
改元の凜々しすめらぎ若葉風
改元の美しき琴線風光る
改元を更に杖とし木の芽風

神麓集

海苔むすび

北川 孝子

ひと粒の涙の重きみどり蔭
雨あとの日差しに透けて濃紫陽花
万緑や谿深く来て海苔むすび
みどり蔭誰もが大もりカレーかな
緑蔭己れに気合ひかけて居り

結び目

直江 裕子

陽炎の中なら少女に戻れさう
声持たぬものの朧ろに溶けやすく
傍らに居る筈のひと遠桜
それとわかる母の結び目ほどく春
さざ波をたたへし春の柱かな

苺パフェ

高木 晶子

苺パフェ似合はぬ席にしぼし居る
抽斗の嵩少しへり子供の日
白川の一重流れに青紅葉
新緑の下で異なる刻過す
青嵐帽子思はず飛び去れり

つちふるや

伊藤 希眸

野火奔る地平線まで見てはしる
花の夜の記憶ガラスの厚さかな
椿まつ赤ぼつと落たり指の麻痺
疵のゐる蓮華野の果て無量光
つちふるや光風と書く石の上

神麓集

感情過多

奥田筆子

二十四の瞳のやうに針魚透き
古池や雑魚が花びら吐き出しぬ
刺しておく画鋏の残り蕊ざくら
花ミモザ感情過多の連鎖して
先づ筆に水ふくませて春の山

三月二十日

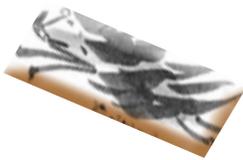
井上菜摘子

三月二十日ドームにわれも怒濤
引退へかたぶく秤春北斗
春揺さぶつて万雷のありがたう
後悔などあらうはずがないバット置く
春あかときイチロー語録ゆつくり羽化

藤に逢ふ

村田あを衣

旅の地図まづ薫風へ開きけり
藤に逢ふ買ひし妻籠の櫛さして
深庇夏炉かかせぬ峡の木曾
めまとひや借りる宿場の魔除鈴
たんぼぼの絮よクルスは根づきた一



鈴鹿呂仁

木曾路（奈良井宿・妻籠宿・諏訪湖）

いざ木曾へ薄暑を駈ける中仙道
緑蔭の固唾呑む音関ヶ原
佐和山の風の虚ろや木下闇
雪溪の雲を走らす槍・劍
新緑のふところにもる権兵衛さん

行灯の点らず奈良井夕薄暑
子燕の軒てんと奈良井宿
蔦駕籠や青葉しぐれの奈良井宿
ロザリオの無きマリア像若葉光
夕照に身をおく諏訪や余花白し
遠山の夏陽は鎮む諏訪たひら
高札の旧仮名古ぶ絮たんぽぽ
席卷の子燕の空妻籠宿
老鶯や踵を返す妻籠宿



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

オーケストラの低音部より恋の猫

京田 山中志津子

桜餅微妙にずれてゐる会話

雪柳吹かれて己見失ふ

花芽寒む晩年の計先送り

啓蟄のアコーデイオンの吐く叙事詩

ものがたりめく雛の夜の四姉妹

梅小寒どんぐり橋を小走りに

美味しさも載せて春いろ広報誌

ままごとの家族は五人土筆摘む

呼び鈴に応答のなしさくら餅

草木に淀みもあらず春の虹

城陽 鷺山 珀眉

花冷えの意外に重き男傘

風光る紙飛行機のパイロット

亀の鳴く不老不死なる水の妙

揚ひばり高天原の高さまで

すみれ咲き千手の祈りとこしなへ

けふ一日納めし夕日花の旅

アンコールいつまで続く飛花落花

花三分鐘の音いろのうすみどり

風の吐息池に映して春惜しむ

京 片山 熙子

棧橋は別れの舞台霞立つ
福 山 亀井 福恵

鳶の輪を上げて連山深眠り

凧ぎわたり魚島時を待つ港

花冷ゆる浦に妻恋万葉碑

潮待ちや妹背並びに古雛

春の宵ワインレッドのゆれはじむ

二輪車の進路をはばむ春疾風

白椿正直ものの傷深し

雪柳風に重さのありにけり

消しきれぬ消しゴムの後春寒し

恋猫や傷つくことも愛といふ

春愁の軸足すこし替へてみる

人の世の出入口鳥帰る

山吹に触る感情線伸びて来る

万葉の流れのほどり雪柳

霾る夕べ卑弥呼の領巾の金色に

雨音も風音も透く山淑の芽

しやぼん玉青き地球の空と海

シャガールの恋人翔ける春の雲

紫は朱あまに交はらず藤ゆるる

福知山 西村 白村

滋子改め

菊池 和子

高 槻 安田 優歌

瓢々と詠むべしさくら増殖中

しやぼん玉すつかり風がやはらかい

雛流し櫓も櫓もなし紀伊水道

はんなりと小倉遊亀の紅椿

終章は苔の彩り落椿

涅槃像死して死なざる腕枕

青春の挫折と夢や春の泥

春光を掬ふ御手美し観世音

山藤の大樹にからむ処世術

考妣の墓前に聞くや春告鳥

鞦韆の風生まれけり御下げ髪

たてがみを梳かす春風親子馬

遠き日の章駄天ふたり石鹼玉

春寒し日本の地発つ尾翼灯

春眠や戻れぬ日付変更線

逃げ水や路面電車のゆつたりと



東 京 高島正比古

京 都 福森 順子

高 槻 石澤 昭代

アリゾナ 伊吹 之博